

前川文夫先生を偲んで

豊 国 秀 夫

私が前川文夫先生のお仕事に深く興味を抱き、研究方法に共感を覚えたのは大学2年生の時である。その年(1952年)、日本植物学会編の「植物学の概観(1940~1945)」が出版され、太平洋戦争の直前および戦時中の日本人植物学者による研究業績がまとめて紹介された。同書の「第2編 分類学及び形態学 第1章 分類理論」の中で、早田文蔵の唱えた因子分配説と動的分類系に触れた後で、近縁な植物の種相互間の立体的な類縁関係の表現法について、次の記述がある。「……複雑な立体的関係を如何にして表示するかの問題に苦心している。少くとも三次元の座標を使って近似値的に表わそうとする努力は前川のギボウシ属(*Hosta*)における投影図の利用……(後略)」。この中に記されている「三次元の座標を使って近似値的に〔ギボウシ属の種の類縁関係を〕表わそうとする」という点が、私が最も興味を感じた部分で、何とかその論文を見たくて、秋山茂雄先生にお願いして、F. Maekawa "The genus *Hosta*" in Jour. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo Sect. III (Bot.) 5 (4) : 317-425 (1940) の別刷をお借りして、当時は現在の様な便利な複写機などなかったのもので、主要な部分を手書きで写し、貧り読んだ。ギボウシ属は、当時私の住んでいた北海道では種類数もすくなく、日頃特に観察していた訳でもなかったが、この論文は後に私がリンドウ亜連の系統を考える際に大変参考になった。

前川先生は、多くの植物記載分類学者がするような新種、新組合せ、新名を数多く作るといような事は余り好まれなかったようで、ギボウシ属は勿論のこと、カンアオイの類やラン科植物、スミレ属などの分類に際しては、器官学、発生学、さらに細胞学にじっくり基礎を置いた分類法を実施された。そのため、先生の研究は実に多方面にわたられた。私の記憶にあるものだけ思いつくまゝに記すと、先生は先ず植物細胞の生活相に3様式あることに着目され、また植物の生活環を示す新方法を考案され、それらを基礎に植物界全般の新分類体系を考えられた。器官学的研究では、葉類説(the theory of leaf class)を提示され、日本における数少ない形態理論の一つを築かれ、この学説は国際的にも高い評価を受けている。植物地理学の立場からは、遡及しうる日本最古の分布区系マキネシアを、またドク

ウツギ型の分布と古赤道との関係を論じられ、地球上における被子植物の起源についての仮説を立てられ、それに関連して南米アンデス山脈の調査に出掛けられた。先生はさらに、細胞学的見地から先行倍数性(major polyploidy)が植物の進化に重要なかわりを持つことを示され、また染色体における欠けること(reduction)が進化の重要な鍵となるという考えを発表された。

このように、先生は国内・外で非常に高く評価される研究を次々と発表されていった。未だ未だ先生には大先輩として国際舞台で大活躍して戴きたかったのに、本年1月13日ついに帰らぬ人となられてしまった。今年先生から戴いた年賀状が先生の御筆跡でなく、しかも「神田三井記念病院にて」と印刷されてあったので御健康を御案じ申し上げていた矢先であった。本当に残念な事である。心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

私は先生から直接分類学の御指導を戴くという機会には恵まれなかったが、比較的早い時期から植物分類学に興味を持っていたため、先生に幾度かお逢いしてお話をする機会を持つことができ、また幾度かお便りを戴いた。特に忘れることのできないのは、チチブリンドウの調査の帰途、小石川植物園でお逢いした時の事である。1956年9月、私は十文字峠でチチブリンドウを採集したが、何とか種子が成熟する迄生かしておきたかった。その時の東京の気温は意外に高く、東京で一週間位仕事をして帰るには、チチブリンドウを生きたまゝの状態北海道迄持ち帰る自信が全くなかった。そこで、小石川植物園に当時園長をされておられた前川先生をお訪ねして結局横浜の鈴木吉五郎氏に預かって戴くことになったのだが、折しも特別暑い日で、ふいてもふいても汗が流れ落ちた。前川先生は私の顔を一目ご覧になれるなり、すぐよく冷えたコココーラを買って来て下さった。全く砂漠にオアシスという感じであった。先生と私とは親子に近い年令の開きがあるが、先生はいつも研究者として礼をつくした応対をして下さり、頭の下る思いであった。筆不精で御無沙汰し勝な私に対してお怒りもされず、別刷をお送り下さる時には、先生の方から「ごぶさたしています」という手紙がそえられ、汗顔の思いをしたことしばしばであった。